

多様な文化を育む“まち”へ

長い年月のなかで富士見という“まち”で培われ、この地にも息づく固有の文化があるとしたら、それはどのようなものなのか——。

過去3年間、私たちはそういう問いを自らの内で反芻しながら、地域に深く根ざす公共劇場となるべく、芸術監督とアソシエイト・アーティストが市民と協働するユニークな創造活動を展開してきました。

田中泯が構成・演出し、18名のワークショップ参加者が踊る「私の子供=舞踊団」のパフォーマンス…矢野誠が作曲、音楽監督をつとめた市民合唱コンサート『地球のことづて』…永井愛と田上豊が演出する市民参加の戯曲リーディング…等々。

館長となった翌年、2011年シーズンの開幕にあたり私はこのパンフレットに、劇場が生み出す舞台作品=レパートリーとは「人間と歴史、共同体とその文化を映し出す〈鏡〉」なのだと記しました。私たちにとって、過去3年間取り組んできた市民との創造活動は、まさに富士見という「共同体とその文化を映し出す〈鏡〉」としての役割を果たすことになりました。

その〈鏡〉から浮かび上がり、見えてきたものは、この地に集う人たちの、圧倒的な文化的多様性でした。踊り、歌い、演じる出演者からは、その人でなければ発見することのできない、固有の生のかたちや世界についての認識が浮かび上がってきます。そして、個々の舞台が私たちに示すのは、富士見という“まち”が、差異を抱える個々の人間が互いを認めあい、深く関わりあって、共に生きることを可能とする、文化的な多様性を育む“まち”へと成長していくためのビジョンでした。

今シーズンは、こうした市民と協働する創造活動の到達地点と、今後の道すじを見定めるための作品として、多田淳之介構成・演出による市民劇『ふじみものがたり』を上演します。

また、芸術監督が演出する新作『奴婢訓』（作・寺山修司）、田中泯が初めて当館で自ら踊る『脱衣浮雲』、永井愛・二兎社との共同制作の新作『鷗外の怪談』など、充実したレパートリー創造の活動にも、どうぞご期待ください。

富士見市民文化会館 キラリ☆ふじみ

館長 松井憲太郎

どこまでも、先へ

近頃は富士見での活動の他に、日本全国の地域や、韓国でも活動させてもらっています。昨年は韓国で最も歴史と権威のある東亜演劇賞の演出賞、作品賞を受賞いたしました。50年の賞の歴史の中で、外国人の受賞は初めてだそうです。この場を借りて、活動を支えて頂いている皆様に感謝と報告をさせていただきます。キラリ☆ふじみも地域の劇場ながら、海外との活動も大切にしてきました。一昨年施行された「劇場、音楽堂等の活性化に関する法律」の前文にも、劇場は“国際社会の発展に寄与する「世界の窓」であることが望まれる”とあります。

地域と海外、一見ローカルとグローバルの両極のように思われるかもしれませんが、決してそうではありません。外国に行けば、当然言葉も文化も違います。それでは、わたしたち日本人同士は“同じ”なのでしょう？ もちろん日本の言葉や文化を共有してはいますが、それも地域によって違いがあります。世代によっても違うでしょう。そして個人によっても何をどう感じるかは全く違うはず。私たちが“同じ”ことを喜ぶのは、そもそも“違う”から、違うひと同士でも繋がれるからです。地域とは、同一性で成立しているわけではなく、多様な人々が一つの括りのなかで共同することです。日本、韓国を含む東アジアも一つの地域です。ひとりひとりの関係から地球の裏側まで、“違う”人々の繋がりグラデーションがあるだけではないでしょうか。

そして芸術には、わたしたちの違いを楽しみ、繋げる力があります。その場にいる人同士だけではなく、何百年前の戯曲や絵画や音楽によって時間も距離も越えて人々を繋げます。「世界の窓」とは、海外へ繋がるだけではなく、わたしの世界の外へどこまでも繋がる窓です。自身の創作活動でも、キラリ☆ふじみも、ひととの繋がりからどこまでも果てなく世界の先へと繋がる活動をしていこうと思っています。どこまでも、夢を持って。

富士見市民文化会館 キラリ☆ふじみ

芸術監督 多田淳之介